

第26回（2014）年度小泉文夫音楽賞受賞記念講演

◆無断引用転載禁止◆

小泉文夫先生が促された日中間の文化交流

陳応時

（上海音楽学院教授）

東京 2015年5月21日

ご来場の皆様、こんばんは。

私は、上海音楽学院音楽学系の名誉教授です。この年になって小泉文夫音楽賞を受賞するとは思ってもよらず、それだけに大変光栄に存じます。

今回、日本の著名な音楽学者、小泉先生のお名前を冠した第26回小泉文夫音楽賞を戴き、私は、先生との出会いにまつわる物語を思い起こさずには居られませんでした。

それは日中国交が正常化した1975年のことです。日中両国の文化交流を促すため、日本は文化代表訪問団を中国に派遣しました。そのころ中国文化部に勤務していた私に、上司は、この訪問団の接待を担当させたのです。しかし、私は日本語ができず、代表団の皆さんとお話もできません。そのため、接待とは名ばかりで、私は部長らと一緒に訪問団の皆さまのお供をして、北京前門にある清朝同治三年（1864年）創業の老舗、全聚徳北京ダックの店まで宴会に出かけ、日本の代表団の方々とともに、美味しいご馳走を堪能したに過ぎませんでした。その宴会で、東京藝術大学で教鞭をとられる民族音楽学者、小泉文夫氏が、日本訪中代表団の一員であると知りました。これが、言わば出会いの物語のプロローグですが、当時の私は、物語にさらなる展開があるろうとは、想像もしていませんでした。

1979年、私は北京人民放送局の語学番組を利用して、日本語を独習しました。2年ぐらいいして、私は自分が専門とする音楽に関する日本語の本を読もうと思い立ち、1981年に出版された『音楽芸術』という雑誌を北京図書館で見つけました。11月号と12月号で、私は日本人の関鼎氏と東川清一氏が、日中両国の古代宮調理論について討論する論文<sup>i</sup>を拝読したのですが、信じ難いことに、ほんの2年しか勉強していない自分の日本語力で、れっきとした日本人の論文が読んで理解できたのです。お二人の論文を読み終わると私は興奮を抑えきれず、いきなり『調と調式——関鼎と東川清一論文を読んで』と題する一文を書き上げました。文中で私はこう述べています：“古代、中日両国音楽家たちの親しき交わりは、長く美談となった。これからは、我々もこの伝統にしたがい、両国の音楽家の間でいっそう友好的な協力につとめ、日中両国音楽に直接関連する問題をともに探求し、全人類の音楽文化の発展に貢献しようではないか。”<sup>ii</sup>

ですが、その時点で私は関先生とも東川先生とも面識がなく、書いた文章をどう処理す

べきかわかりませんでした。その後、私は数年前にお会いした小泉先生を突然思い出し、先生に自分の文章をお送りしました。小泉先生は私の文章を受け取られたとたんに、当時、東京学芸大学で教えていた東川清一先生に転送して下さいました。東川先生もすぐに『陳応時氏の論文「調と調式について：関鼎と東川清一論文を読んで」について』と題する回答を寄せられました。<sup>iii</sup>文末の追記から、東川先生は、小泉先生から私の文章を受け取るや否や、ご本人は中国語を解されないため、中国語に長じた高畑常信、川上孝子、染谷周子の三氏に解説協力を依頼し、論考作成に取りかかったことがわかりました。初稿を書き終えると、東川氏は、東京芸大で開催された日本音楽学会と東洋音楽学会合同例会で発表し、さらに整理を経て、『音楽研究』1983年3月号に投稿発表されたのです。氏はこの掲載号を私に送って下さり、私がまた論文を書いて議論を続けるよう、同封の書簡で書き送られました。そこで私は『「転旋・転均・転旋均—東川清一論文を読んで」』<sup>iv</sup>を書き、お返事にかえたのです。その後さらに『転旋均、唐代犯調、日本音階』<sup>v</sup>などの文章を書き、松岡栄志先生らの手で日本語訳され、再び『音楽芸術』で発表する運びとなりました。

東川清一先生もまた、中国の学術雑誌で多くの優れた論考を発表されました。「チョウを考える：関論文に発して」<sup>vi</sup>や『陳応時氏論文「“調”と“調式（旋法）”について：関鼎・東川清一論文を読んで」を読んで』<sup>vii</sup>、『続・チョウを考える：中国の琴・箏の調弦法をめぐって』<sup>viii</sup>、「所謂“宮、商、角、徵、羽”」をめぐって』<sup>ix</sup>、『日本音楽3題—五声名・箏および三味線の調弦法をめぐって』<sup>x</sup>、『宮＝ファのために—陳応時『中国伝統音楽の基本理論』を聞いて』<sup>xi</sup>、『中国の“均”と日本の音階』<sup>xii</sup>などです

このころ、中国の宮調理論に精通する中国音楽学院の樊祖蔭院長が、我々の討論を支持し、二人の学術討論に加わり、氏も『調と調式を語る：関鼎、東川清一と陳応時の論文を読んで』と題して論文を発表しました。<sup>xiii</sup> 樊院長は文中次のように述べています：“1981年11月に『音楽芸術』誌上で関鼎氏が発表した「中国の文献記載にみる日本雅楽の調の原型」を発表したことで、両国伝統音楽の調や旋法、また中国古代の調名を現代の音楽用語でいかに表すかにつき、日中両国の音楽研究者の間で議論を呼んでいる。『広州音楽学院学報』1983年第三期は、関、東川および陳応時の関連論文をまとめて掲載し、中日両国の調や旋法、その表記について、一歩踏み込んだ討論を促し、中日両国音楽文化の交流を強化する上で、間違いなく意義深い事柄であった。”

1994年9月、東川清一先生のおとりなしにより、私は始めて日本に招聘され、東京藝術大学、国立音楽大学、大阪大学、慶應義塾大学、武蔵野音楽大学、そして日本音楽学会と東洋音楽学会の合同例会で、講演させていただきました。この間に、岸辺成雄先生をはじめ、少なからぬ日本人研究者の諸先輩と面識を得ました。

1996年、春秋社から、東川氏と私の共著『音楽の源：中国伝統音楽研究』が刊行されました。私の執筆部分は、松岡栄志氏と、村越貴代美氏が日本語に翻訳して下さいました。

この折の学術交流を経て、私は宮調研究に特別関心を寄せることとなり、現在まで40数編の宮調に関する論文を上梓しました。これらを基に、ただいまは、2011年度国家社会

科学基金芸術学国家重点項目「中国伝統音楽宮調理論研究」（項目番号：11AD003）の課題に取り組み、一日も早い完成をめざし全力を尽くしています。

以上お話した一切は、小泉文夫先生が東川清一先生に引き合わせて下さった後に起こった事です。それゆえに、小泉先生には感謝申し上げたいと思います。同時に、お力添えを賜った東川清一先生、松岡栄志先生、その門下の方々にも、心より謝意を表します。

---

<sup>i</sup> この2篇は：(1) 関鼎「中国の文献に記されている わが国の雅楽の調子の原型」『音楽芸術』1981年11月号、および(2) 東川清一「チョウを考える：関論文に発して」『音楽芸術』1981年12月号。2文とも陳応時（筆名“伯帰”）訳、林曄校訂。中国語訳版は『広州音楽学院学報』1983年第三期所収。

<sup>ii</sup> 『広州音楽学院学報』1983年第三期所収。

<sup>iii</sup> 同論文は、林曄中国語訳、陳応時（筆名“伯帰”）校訂、『広州音楽学院学報』1983年第三期所収。

<sup>iv</sup> 陳瑩玲、村越貴代美、幸福香織訳『音楽芸術』1983年7、8月号『音楽芸術』所収。中国語原文は『広州音楽学院学報』1983年第三期所収。

<sup>v</sup> 松岡栄志訳『音楽芸術』1984年9月号所収。中国語原文は『広州音楽学院学報』1985年第二、三期合刊所収。

<sup>vi</sup> 陳応時（筆名“伯帰”）中国語訳、林曄校訂、『広州音楽学院学報』1983年第三期。

<sup>vii</sup> 陳応時（筆名“伯帰”）中国語訳、林曄校訂、『広州音楽学院学報』1983年第三期。

<sup>viii</sup> 林曄中国語訳、陳応時校『広州音楽学院学報』1984年第三期。

<sup>ix</sup> 王北成中国語訳『中国音楽』1986年第四期。

<sup>x</sup> 王少軍中国語訳『黄鐘（武漢音楽学院学報）』1992年第四期所収。

<sup>xi</sup> 趙維平中国語訳『音楽研究（上海音楽学院学報）』1995年第一期所収。

<sup>xii</sup> 陳海宇中国語訳『中国音楽』1996年第三期所収。

<sup>xiii</sup> 原文「也談調與調式—関鼎、東川清一和陳応時論文読後」『広州音楽学院学報』1984年第三期所収。